

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：地域連携と県民参画により進める博物館づくり事業

事業者名：三重県立博物館

三重県生活・文化部新博物館整備推進室

住所：三重県津市広明町147-2

TEL：059-228-2283

FAX：059-229-8310

HPアドレス：<http://www.pref.mie.jp/HAKU/HP/>

連携事業者名：三重県博物館協会、桑名市博物館、  
松阪市文化財センター(はにわ館)、  
伊賀流忍者博物館、芭蕉翁記念館

会場：松阪市文化財センター(はにわ館)、史跡  
旧崇廣堂(伊賀市)、六華苑(桑名市)など

事業期間：平成21年6月15日(月)  
～平成22年3月15日(月)



三重県立博物館全景

## 1. 館の使命と本事業の関係

三重県では、平成26年の新県立博物館開館をめざして、「ともに考え、活動し、成長する博物館」を活動理念として、県民・利用者との「協創」と多様な主体との「連携」による博物館活動を展開し、三重の自然と歴史・文化の資産を保全、継承し、人づくりと地域づくりに役立つ博物館づくりを進めている。この事業は、「協創」と「連携」による博物館活動の一環として、地域の博物館や博物館に関わる県民等とともに、未来を担う子どもたちを対象とするプログラムに取り組んだものである。

## 2. 企画内容

### ①事業目的

博物館の存在意義を県民の参画及び地域の博物館との連携による新たなアプローチで探求するとともに、そのプロセスを県民や博物館関係者などに報告書・パンフレットなどで分かりやすく伝え、博物館のあり方について考える機会を誘発する。これらを通じて、広く県民と博物館のあるべき姿を追求し、三重県独自の博物館基盤整備をめざす。

### ②事業概要

子どもたちを対象とする2つのプログラムとその成果を発信するプログラムによる3つのプログラム構成により実施した。

#### ○プログラムⅠ「博物館きわめるプロジェクト モノって何だろう？」

地域の博物館とともに、子どもたちが、自分とモノとの関係を考えながら、博物館のおもしろさが実感できる3種類のワークショップを実施した。併せて、関係者が講師等とともに企画の意義を議論し、スキルアップや交流を広げるための「企画交流ラボ」を実施した。

#### ○プログラムⅡ「みんなでつくる博物館 新博ティーンズプロジェクト」

10代前半の子どもたちが、博物館見学ツアーやワークショップ等を通じて博物館への認識を深め、魅力的な博物館について、大人との対話(こども会議)を行うことで、博物館づくりに子どもが参画できる仕組みを探るために、7回シリーズのプログラムを実施した。

#### ○プログラムⅢ「伝えて広めるプロジェクト」

プログラムⅠ・Ⅱの実施プロセスや成果を参加者や関係者の内部だけにとどまらせるのではなく、広く発信することによって、博物館についての認知度の向上やさらなる連携と交流を促進するための効果的な伝え方や発信方法を開発し実践した。

### 3. 事業実績

#### (1) 監修とコーディネーター

監修 布谷知夫さん（滋賀県立琵琶湖博物館名誉学芸員）

コーディネーター 染川香澄さん（ハンズ・オン プランニング代表）

#### (2) 事業の主な内容及び日程

##### ○プログラムⅠ「博物館きわめるプロジェクト モノって何だろう？」

「モノって何だろう？」をテーマに、県内の博物館と連携して、小学4～6年生の子どもたちを対象とするワークショップと関係者のスキルアップや交流の場となる「企画交流ラボ」を実施した。

##### 《ワークショップ》

##### ①松阪会場「本物に出会ったドキドキを誰かに伝えよう！」

講師 竹内伸子さん（絵手紙作家）

日時 平成21年(2009年)9月26日(土)

会場 松阪市文化財センター（松阪市外五曲町）

##### ②伊賀会場「いざ子ども 石の上にも 3時間」

講師 塩瀬隆之さん（京都大学総合博物館 准教授）

日時 平成21年(2009年)11月1日(日)

会場 史跡旧崇徳堂（伊賀市上野丸之内）

##### ③桑名会場「物の語りを聞く - お茶箱プロジェクト」

講師 佐藤優香さん（国立歴史民俗博物館 助教）

日時 平成21年(2009年)11月21日(土)

会場 六華苑（桑名市大字桑名）

##### 《企画交流ラボ》

・松阪会場 平成21年(2009年)9月25日(金)

・伊賀会場 平成21年(2009年)10月30日(金)

・桑名会場 平成21年(2009年)11月20日(金)

##### 《参加者数》

ワークショップ：松阪会場 12名、伊賀会場 20名、桑名会場 14名

企画交流ラボ：松阪会場 16名、伊賀会場 19名、桑名会場 16名



松阪会場



伊賀会場



桑名会場



企画交流ラボ

##### ○プログラムⅡ「みんなで作る博物館 新博ティーンズプロジェクト」

小学5年生～中学3年生の子どもたち18名が、博物館見学ツアーやワークショップを通じて博物館への認識を深め、魅力的な博物館について、大人と対話する「こども会議」を行った。

##### 《リーダー(ファシリテーター)と応援団》

リーダー 嵯峨創平さん（NPO 環境文化のための対話研究所代表）

応援団 布谷 知夫さん、染川香澄さん

ゲスト応援団 中西 紹一さん（(有)プラス・サーキュレーション・ジャパン代表）

##### 《日程と内容》

・第1回 8月8日(土)

オリエンテーション（私たちにとって博物館って？）



博物館見学ツアー1（滋賀県立琵琶湖博物館）



ティーンズワークショップⅠ



- ・第2回 8月22日(土)  
博物館見学ツアー1 (滋賀県立琵琶湖博物館)
- ・第3回 9月19日(土)  
博物館見学ツアー2 (兵庫県立考古博物館)
- ・第4回 10月3日(土)  
ティーンズワークショップⅠ  
(私たちがやってみたいことって博物館で実現できる?)
- ・第5回 10月31日(土)  
ティーンズワークショップⅡ  
(どんな博物館が欲しいか考えてみよう! その1)
- ・第6回 11月7日(土)  
ティーンズワークショップⅢ  
(どんな博物館が欲しいか考えてみよう! その2)
- ・第7回 11月28日(土)  
10代と大人が博物館をめぐって対話するこども会議



こども会議(ショートストーリー)



こども会議(大人との対話)

#### 《参加者数》

小学生9名(男子7名、女子2名:5年生2人、6年生7人)

中学生9名(男子4名、女子5名:1年生6人、2年生3人)計18名

〔地域別:津市3人、松阪市6人、伊勢市1人、鳥羽市1人、南伊勢町1人  
四日市市2人、菰野町1人、東員町1人、伊賀市2人〕

### ○プログラムⅢ「伝えて広めるプロジェクト」

プログラムⅠ・Ⅱの実施プロセスや成果を参加者や関係者の内部だけにとどまらせるのではなく、広く知ってもらうために、参加者募集チラシや普及用冊子、記録番組を作成した。デザイナーやカメラマンなどの専門家とともに企画・検討を行い、印刷物や映像を通じて伝えるためのノウハウ、効果的な伝え方や発信方法を学び、今後の活動に生かしていくことをめざした。

デザインアドバイザー 三宅由莉さん(トロワ・メゾン 代表)

#### 《工程》

- ・6～8月 プログラムⅠ・Ⅱの参加者募集  
チラシの作成・配布
- ・8～11月 プログラムⅠ・Ⅱの取材
- ・12～3月 プログラムⅠ・Ⅱの印刷物・映像等制作、配布・放映



親しみやすいキャラクター

#### 《作成した印刷物等》

- ・プログラムⅠ・Ⅱ 募集チラシ

対象となる子どもをはじめ、広く一般に、参加者の募集を行うとともに、新博物館整備の周知を図るため、親しみやすいキャラクターを用いた募集チラシを印刷・配布した。

#### 印刷部数

プログラムⅠ: A4版 130,000部

プログラムⅡ: A4版 85,000部



博物館きわめるプロジェクト募集チラシ



ティーンズプロジェクト募集チラシ

・プログラムⅠ 普及用冊子

子どもにも親しまれるような内容としながらも、  
子どもの周辺にいる大人（保護者や学校の先生など）  
を主な読者層と位置づけて作成した。

冊子印刷仕様・部数：A4 版変形、10,000 部

・プログラムⅡ テレビ番組の制作と放映

新博ティーンズプロジェクトの活動を、テレビ番組で  
放映し、子どもたちが行きたくなる博物館像がどのよう  
なものかを伝え、新博物館への期待を高めるものとした。

放映期間：平成22年(2010年) 3月1日～3月15日 のべ97回（30分番組）

放映会社：県内ケーブルテレビ9社（制作：ケーブルコモンネット三重、アイティービー）



博物館きわめるプロジェクト普及用冊子

#### 4. 事業の成果及び今後の課題

##### ○プログラムⅠ「博物館きわめるプロジェクト モノって何だろう？」

子どもたちの生き生きとした様子などから、ワークショップを楽しみ、モノ（資料）や博物館への親しみを深める機会とすることができた。参加者の満足度も高く、アンケートにも、とてもたのしかった、モノをあんなに長く見たのははじめてだったなどの感想が寄せられている。

また、最先端で活躍されている講師とともに取り組んだことにより、ワークショップのあり方や進め方などを学ぶとともに、連携館との人的交流や新たな交流を生み出す機会とすることができた。

一方、「企画交流ラボ」は、ワークショップのためのリハーサルと関係者の研修の場を兼ねたものとしたため、時間や内容の面でやや中途半端になってしまった。また、連携館以外の県内博物館や博物館に関わる県民・利用者にも参加・参画をしてもらい効果を広げようとした点についても、十分な成果をあげられなかった。今後、実施目的や目標を整理するとともに、事業の成果やノウハウを共有し広げるための効果的な方法について工夫していきたい。

##### ○プログラムⅡ「みんなでつくる博物館 新博ティーンズプロジェクト」

プログラムを通して、子どもたちの博物館に対する思いを知ることができた。その中から生まれた合言葉「ともだちができる博物館」は、今後の博物館活動のヒントとなるものと考えている。最後のこども会議では、この合い言葉をテーマに、四つのグループに分かれて、理想の博物館のイメージを短いお芝居にして発表した（マンモス狩りができる、展示を食べちゃう、買える展示など）が、その中でも、子どもたちの本音や魅力ある博物館づくりのためのヒントが数多く詰まっていたと受け止めている。子どもたちからも、ともだちができてよかった、博物館の楽しさがわかった、一緒に博物館づくりがしたくなったなど力強い感想を得ることができた。

今後、今回参加した子どもたちとの関わりを大切にするとともに、このような取組を、どのように継続・発展させ、子どもたちの参画の仕組みとして展開させていくことができるかが課題である。

##### ○プログラムⅢ「伝えて広めるプロジェクト」

プログラムⅠとⅡの実施プロセスや成果を効果的に伝え、幅広い理解を得るために必要な発信の方法や内容について、デザインや写真、映像の専門家とともに取り組む中で、実践的に学ぶ機会とすることができた。今後、今回作成した普及用冊子の配布や番組映像の放映をはじめ、さまざまな方法・機会をとらえて事業成果を発信する取組を進めるとともに、このプログラムで得たノウハウを博物館の発信活動にも根付かせていけるよう取り組んでいきたい。